

室積映画上映企画

伊勢 真一監督作品『奈緒ちゃん』

“毎日映画コンクール記録映画賞グランプリ”・“第6回文化庁優秀映画作品賞”等、受賞作品

2024年4月29日(月・祝日) 会場: 喫茶はらだ 山口県光市室積3-3-15 ※飲み物は販売しております。

上映時間

午前 10:00~11:40 (開場9:30~)

午後 14:00~15:40 (開場13:30~)

参加費

1,000円(各回:定員30名)

※お支払いは当日受付にて(現金のみ)

各上映終了後、伊勢 真一監督のトークショーを予定 ※トークショーは30分程度を予定しております。

※チケットは事前予約制です。当日受付は予約に空きがある場合にのみ承ります。

【演出】伊勢真一 【撮影】瀬川順一 【音楽構成】木村勝英・伊藤幸毅 【編集】熱海鋼一 【語り】伊藤惣一 【製作】大槻秀子

重慶のてんかんと知的障害をもつ少女、奈緒ちゃん。この映画は、へ彼女が家族に育まれ、家族が彼女に育まれた少女時代12年間を記録したヒューマンドキュメンタリーである。



奈緒ちゃん

育み、育まれる家族のしあわせ。

毎日映画コンクール記録文化映画賞受賞
文化庁優秀映画作品賞受賞
山路ふみ子福祉賞受賞
高輪映画祭特別賞受賞
JSC特別賞受賞
キネマ旬報ベスト10 第2位
日本映画ペンクラブベスト5 第2位
ボレボレアカデミー作品賞受賞
フランスリアルドキュメンタリー映画祭特別招待
山形国際ドキュメンタリー映画祭特別招待

まるで自分の親戚の家の出来事を見聞きするような、親身な気持ちで見ることのできる映画でした。とても良かったです。佐藤忠男 [映画評論家]

平凡な家庭のなかで、(障害)と立ち向かう。西村家の(ノーマライゼーション)の実践といえよう。松友了 [国際てんかん協会副会長]

知的障害者と呼ばれる人たちが、われわれの住む社会にとっていかに平和的で

かけがえのない友人であったのかということが、この映画を観るとよくわかる。小室等 [シンガー]

奈緒ちゃんのイノセントさとユーモアがまわりを勇気づけてくれる。励ましてくれる。奈緒ちゃんはしっかりと生きている、と思った。熊楚御堂朋子 [NHKディレクター]

奈緒ちゃんがらやましい! お父さん、お母さん、地域の人々! みんなあったかくて素敵! 涙が止りませんでした。石川敦子 [日本テレビアナウンサー]

子育てが必死だった時には大きかった公園が、ある日ともちっぽけに見える。

十二年ひとりの家族を見続けたことで、そんなふうに家族の風景が時代と共に見事にあぶり出されている。佐藤 真 [映画監督]

photo:本橋成一

【製作】奈緒ちゃん製作委員会・デコ企画 【配給】奈緒ちゃん上映委員会 [いせフィルム内] 1995年/カラー/16ミリ/98分

＼ご予約はお早めに／

↓チケットは事前予約制↓

“むろづみ空想計画舎”
予約フォーム(下記QRコード)
もしくは

電話: 090-3695-6621
(担当: 河内(こうち))まで



主催: むろづみ空想計画舎 後援: 光市教育委員会・光市社会福祉協議会

※むろづみ空想計画舎は、光市室積をフィールドに地域の文化を守りつつ、来訪者を増やす活動を行なっているまちづくりの市民団体です。

→ 詳細は裏面に

Introduction 伊勢真一のつぶやき (1995年)

「姉に長女が生まれた。しかし、普通ではない、何かの病気のような」と知ったのは、記録映画の編集者だった父、伊勢長之助が亡くなった年、今から20年前のこと。姉の長女、奈緒ちゃんの病気がてんかん(※)で、知的障がいをもなっているとわかったのは、それからさらに数年後でした。ドキュメンタリーの仕事を始めて、父にかかわりのあるスタッフとめぐりあい仕事を共にするようになった頃、奈緒ちゃんはすでに小学生になっていました。奈緒ちゃんの映画を撮りたいとの願いに、一も二もなく応じてくれたのは、父の親友だったカメラマンの瀬川順一氏、父とは師弟関係にあった音楽・音響構成の木村勝英氏、編集の熱海鋼一氏でした。

クランクインは1983年1月3日。8才になった奈緒ちゃんのお正月の初詣のシーンでした。フィルムが買えず、つきあいのあるプロダクションから古いフィルムを譲り受け、みんな手弁当での協力の、奈緒ちゃんのお父さんは「なんで、一銭にもならないことにあんなに夢中になれるのか。映画づくりにかかわる人達の気持ちは理解できない」とさかんに首をかしげていました。いわゆる福祉映画にするのはやめよう。そのために、奈緒ちゃんとその家族の普通の日々をじっくり視すえてゆこう、と奈緒ちゃんのもとへ通い続けました。

てんかんという病気には発作がともないます。奈緒ちゃんが多い日には2度、3度と起こしていた発作を撮影すべきかどうか……。スタッフの結論は、撮らない、ということでした。この映画の狙いはそこではない。発作を描けばインパクトも強く、病気に対する理解も得やすいかもしれないが奈緒ちゃんのその姿を見せ物にするのは忍びない。しかし、それぞれのスタッフの心の中には、事実から目を離してはいけないというプロのドキュメンタリースタッフとしての想いもありました。そんな想いを知ってか知らずか、12年間の撮影中、不思議なことに奈緒ちゃんは一度もスタッフの前で発作を起こしませんでした。

このフィルムには「しあわせ」が写っているとつぶやいたのは、大ベテランのカメラマン、瀬川さん。「しあわせ」という言葉がなぜかかともなつかしく、新鮮な響きに聞こえたのを今でも忘れません。

<しあわせ、家族のしあわせ>

12年の歳月が流れて奈緒ちゃんは20歳に、お母さんは地域作業所のリーダーに、お父さんは会社や地域の要職に、弟の記一君はJリーグをめざす高校生に成長し、奇しくも父の23回忌にあたる今年、映画は完成しました。映画『奈緒ちゃん』はこれから、作品としてひとり歩きしてゆきます。多くの人に見守られることを祈るばかりです。

(※) てんかんとは、それまで何のかかわりもない人が突然発作を起こし、しかもその発作を繰り返す、脳の慢性的な病気のことです。現在、てんかん発作のほとんどは薬で抑えることができるようになりました。しかし、てんかんに対する恐れと誤解はまだ強く、就職、結婚などの際に差別を強いられることも多く、患者やその家族が病気をひた隠しにする傾向があるとされています。国際てんかん協会の試算によると、世界には人口のおよそ1パーセントのてんかん患者がいます。日本では、およそ100万人の患者がいるにもかかわらず、まだまだ社会的には知られることの少ない病気です。主人公の奈緒ちゃんは、続発性全汎てんかんのひとつであるレノックス症候群とよばれる重度のてんかんをもち、知的障がいも併せもつ重複障がい者です。



監督：伊勢 真一 いせ・しんいち

1949年東京生まれ。日常をふんわりと映し出す映像の中に、生きることの素晴らしさが込められた独特の作風で知られる。主な長編作品に、『奈緒ちゃん』(95)、『ルーペ』(96)(日本映画ペンクラブ記録映画グランプリ、キネマ旬報文化映画ベストテン第3位)、『えんとこ』(99)等、長年にわたり数多くのヒューマンドキュメンタリーを自主製作、自主上映で作り続けている。近作は『えんとこの歌 寝たきり歌人・遠藤 滋』(19)で毎日映画コンクール・ドキュメンタリー賞、文化映画賞を受賞した。

主催より

この度、色々なご縁が重なり、『奈緒ちゃん』の上映、および伊勢監督に光市へお越しいただけることとなりました。伊勢監督は、全国各地域で上映会をされている中、山口情報芸術センター [YCAM] でも何度も上映、トークショーをされており、トークショーでは質問コーナーを設けてくださいます。令和2年度も、文部省映画賞を受賞し、奈緒ちゃんシリーズも数々の賞を受賞されている伊勢監督に直接お話が聞けますので、大人だけでなく、学生たちにも、是非観に来ていただくと嬉しいなと思っております。

上映会の収益は、今も作り続けている、奈緒ちゃんシリーズの映画制作や、障害者への理解が深まる活動に使わせていただきます。(奈緒ちゃんシリーズは今年春5作目新作発表とのこと)
自主上映という初めての試みに、不慣れなこともあります、応援頂けると幸いです。 むろづみ空想計画舎

上映会サポートしてくださる方、大募集！表面のお問い合わせ先よりお気軽にご連絡ください。

むろづみ空想計画舎：<https://murozumi-yamaguchi.com/>